

口頭発表「自己肯定感の低い児童への支援」

～自己有用感を高める飼育当番活動を通して～

今西 満子



1 はじめに

前任校には、平成10年度に赴任し特別支援学級担任・特別支援教育コーディネーターを兼務した後に、平成18年度から平成22年度まで発達障害通級の担当をした。その後、他校勤務を経て、平成26年度から平成28年度までは校長として再び前任校に勤務した。その前任校での16年間は、主に自己肯定感の低い児童への支援を行ってきた。また、飼育委員会を担当し、支援の必要な児童とともに教室内で「ニワトリ・うさぎ・モルモット」の飼育をした取組を紹介する。

2 前学校の課題と取組

前任校は奈良市西部の丘陵地にあり、全校児童約400名、通常学級13クラス、特別支援学級4クラスの中規模校である。また、通級指導教室は2教室あり、同敷地内に幼稚園が併設されている。

平成16年度から2年間奈良市特別支援教育推進モデル事業の指定校となり、「障害児教育」について再考することとなった。それを受け、全職員で「教育的ニーズとは何か」を考え、支援の対象を発達障害が起因することだけに限定するか否かについて検討した結果、障害の有無にこだわらず全ての児童を対象に支援することにした。その理由として、通常学級で毎年のように学級崩壊があり、従来の生徒指導だけでは立ち行かず、ますます児童が荒れていくよう

に思われたので、生徒指導に特別支援教育の視点を入れることにしたのである。その第1番目の支援対象者が「Hくん」である。

3 児童の実態

Hは、入学当初から負けず嫌いで、負者になると勝者を涙目で睨みつけたり、時として攻撃したりすることがあった。ただ、運動神経が良く、発想が豊かであったため一目置かれるクラスのリーダー的な存在でもあった。

しかし、中学年になると学習面のつまづきが見え隠れし始め、教員への反抗的な態度が顕著になった。また、勝敗へのこだわりが強くなり、友だちとのトラブルが頻繁に見られるようになった。さらに乱暴な言動がエスカレートし、授業妨害や他傷行為を行うこともあったが、情に厚く気の合う友だちを必要以上に擁護する面も見られた。

4年生後半には、医療機関を受診しADHDの診断を受けた。リタリンの服用も開始したが、副作用が強く飲まない日も多くあり、また、午前中で効き目がなくなってしまふなど、なかなか薬に頼ることができない状態が続いた。

さらに、5年生では、飼育委員会に所属したが、クラスの当番活動は一切行わず、器物破損行為をするHへの指導に担任も困り果てた状況であった。

4 飼育活動の実際

(1) 飼育委員会

平成17年度当時、飼育委員会の活動は、登下校中の安全確保のため長期休業中や放課後の活動ができず、休み時間のみの活動であった。そうした状況のなかで、飼育小屋には、ウコッケイの他に、長年児童や教員からも敬遠されていた1羽の「凶暴な」雄のニワトリを飼育していた。こうしたなか、皆が敬遠していたニワトリをHが世話することになり、他児童は卵を産むウコッ

ケイの世話を好んでしていた。

また当時、動物アレルギーの問題や「鳥インフルエンザ」等の飼育動物の病気感染の不安が取りざたされ、活動中の衛生管理の困難さもあり、児童の中にはじゃんけんで負け仕方なく委員会に入った者や、教師も同様に命を預かる委員会を敬遠しがちな現状でもあった。

(2) 教室内での動物飼育



平成 17 年度、「うこっけい」の雛 2 羽を特別支援教室で飼うことにした。すると、H は得意気に友だちを連れてやって来るようになった。休み時間には子どもたちがあふれた。そして、特別支援学級の児童との交流も自然発生し、特別支援教室は全校児童のオアシスとして位置づけられた。

また、平成 21 年度には「うさぎ」の赤ちゃんをしばらく通級指導教室で飼ったことがあった。不登校気味で教室を利用していた児童が元気に登校し、ウサギに会いに来た。改めて、子どもたちが動物を求めていることを実感した。

今までの経過を経て、特別支援学級でモルモットを本格的に飼うことにした。毎日の世話を当番制にし、休み時間には全校児童対象に教室を開放し誰でもふれあえる時間を設けた。週末には、当番の保護者が家庭に持ち帰り、児童と共に世話をしてくれた。

5 その他の支援内容

(1) ソーシャルスキルトレーニング

H の日常生活の中で起きる様々な人間関係におけるトラブルを教材にし、小グルー



プで具体的に問題解決をしながら、社会的に受け入れられやすいマナーやルールを「技（ワザ）」として獲得させていった。

(2) ペアレントトレーニング（以下 P T）

米国のフランケル博士が開発したプログラム「親訓練」をもとに、保護者に H の行動を理解してもらい、適切な対応法を学ぶ機会を設けた。そして、よりよい親子関係づくりと H の適応行動の増加を目指した。

(3) ティーチャー トレーニング

前述の P T の「教員訓練」版である。H の課題となる行動の原因は、脳の発達のアンバランスによる症状であることを教職員全員で確認し、周囲の対応によって H の経過が大きく変わること理解してもらった。これまでの教育指導に新たに「発達障害」「行動療法」の考えをプラスしてもらうことにした。

(4) 特別支援学級との合同学習

自立学習として、多様な課題をもった異年齢集団の中で、学び合い高め合う喜びを体験させた。また、苦手な算数の授業を取り出し、小グループ学習及び個別学習を実施した。

6 H の成長



5 年生で飼育委員会になった H が、「凶暴な」ニワトリを得意になって世話し始めたことをきっかけに、毎朝、飼育舎の観察か

ら始まり、何か変わったことがあれば職員室の前で私を待つようになった。

また、中休みにもなれば鍵を取りに飛んできて、昼休みには飼育舎の中で長い時間を過ごすようになった。「誰にも出来ないことができる。」と周りの児童から高く評価され称賛され、「自分しかできないことがある。」と自分が持っている力を自覚することができた。また、まったく当番活動をしなかったHが生き生きと飼育当番をする姿は友だちからも教員からもすぐに認められた。

教員との関係が良くなったことで、様々な教員の言葉に耳を傾けるようになり、10月から特別支援教室で学ぶことにも同意した。6年生になると、難しかった薬の服用もするようになり、トラブルは目に見えて減った。また、運動会や音楽会では団長や指揮者を務め、クラスだけでなく学校のリーダー的存在として成長を見せ、低学年の児童への思いやりのある言動も増し、自己肯定感が低くなっていたHが、短期間で自己有用感を高めることができた。

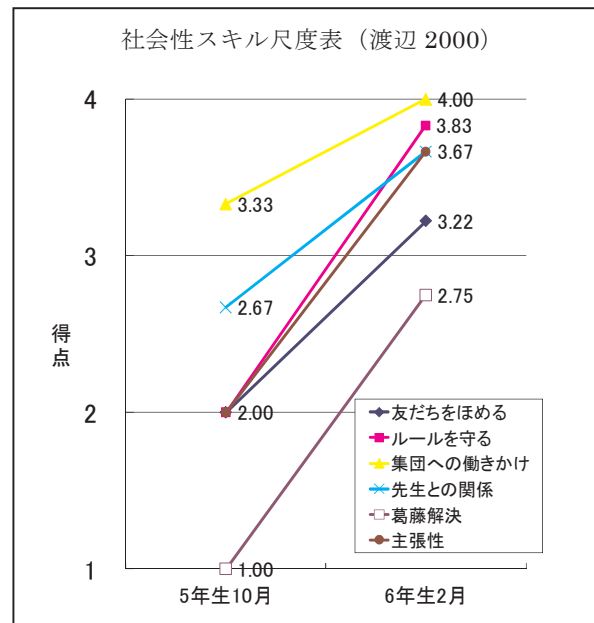
7 学校飼育の成果と課題

飼育委員会活動がH感情が低下し自己肯定感がもてなくなっていた児童にとって、飼育当番活動は「自分が役に立っている。」と短期間で感じる活動となった。さらに、学習意欲が低下した児童や友だち関係で悩んでいる児童にとっても、登校する目的（動機）が「動物の世話」になるケースも見られた。

このように動物とふれあうことで、自己有用感が高まったり、命の温もりに癒されたりし、自己肯定感へと徐々につながり、主体的に学習活動にも参加できるようになった。

しかし、その成果は、個人差や教員の関わり方（声かけ等）によって変わることも課題の一つである。

動物が与えてくれる効能を評価することは難しく、時には、「相手の気持ちが分かりにくい」という障害を持つ児童が、動物とふれあう過程において、力加減が分からなかったり、相手の痛みが理解できなかった



りすることがある。その様子を見た教員から動物虐待の状態に見えると心配の声が上がることもある。

このように学校現場における教員間で、その効果を共有することは容易ではない。また、担当する教員の負担だけでなく、動物アレルギーや飼育費用の問題など、克服しなければいけない課題は多岐にわたる。

ただ、特別支援学級などの一部の児童を対象とした場合においては、そうした課題を最小限にとどめ、動物を飼育することで、自己有用感を高め、「共感」することを学ぶ機会となることも大きな成果であると確信している。

8 おわりに

動物飼育は、子どもたちが命の大切さや不思議を実感として心に刻むことができる機会になる。小動物に触れ合ったり、世話をしたりすることで、「命」の温かさや愛おしさ等、豊かな情操を育むことができる。さらに、責任感や自尊感情を高める効果も期待できる。このことを教員や保護者、地域の方と共有することができれば、様々な課題を解決できるのではないかと思う。

例えば、前任校では、「ファミリーサポート制度」を導入し週末や長期休業中の世話をしてもらっている。

まず、保護者に趣旨を伝え、協力してくれる家庭を募る。そして、参加する家

庭（ファミリー）を決定し、学習会を実施する。次に年間の当番表を作成する。ピンク・青・黄の3つのバックを用意し、順に各ファミリーに回していく。そのバックの中には、うさぎの世話の仕方が書かれた本、連絡用のメモ帳、飼育小屋の鍵が入っている。学校が閉校している週末に親子、家族で来校し、うさぎを小屋から出して芝生の「ふれあいゾーン」で共に遊ぶことができる。

この取組は、教員の負担軽減と住環境や様々な理由で家庭では動物を飼えない家族にその願いを叶えさせることもでき

る。

また、「ふるさと納税」母校応援寄付の導入で、施設改修を実現させ、新たに「ふれあいパーク」を作ることができた。

このように、飼育のための必要な経費等を保護者や地域の協力で補うことができる方法はあるのではないかと思う。

子どもたちが成人するまでに「命」のぬくもりを肌で感じさせる教育は、「命」を慈しみ「あたたかな心」をもった人になるために、必要不可欠なものであると考えている。

（奈良市立登美ヶ丘小学校校長）



ファミリーサポート用グッズ



ふれあいパーク